齊菫集

上編 中巻

骨董集上編中之巻

江戸　醒ヒ輯

○名古屋帯 一

文禄前後より寛永の比までの古画を見るに男女ともに紐と紐とを一縄に似たる両端に総をつけたるを用ひ帯にまとふ体なりそれ其色いと白あり紅なり青黄赤など彩色まちまちあり按ずるに是いゆる名古屋帯なるべし昔肥前の名古屋より唐糸をもて組ゆゑ名古屋帯とも又組帯ともいひしと或人いふ

和名鈔 腰帯類云 繃帯 和名加良久美乃 織絲為帯也

とあり加良久美は韓組なり名古屋帯は此韓組帯の遺制ならん又源氏梅枝の巻に「びんの口つくろひ」とあるは巻物の紐をいふ

和名鈔 服玩具云 四聲字苑 綫青而黄也 かれは文禄前後より古画に青黄赤かどんいろどりなる組帯あるは是則綫なれば帯なるべき歟

一代男 天和二年印本 二之巻ふ云「小塩山の名木落花らうぜん今ひとしれぬことまつ
しらふ男達其比い捕手居合しやうく世の風俗も糸鬢ふしくさげ二すぢ
結れ鬢上髪のくして袖下九寸ばかり。染分の組帯。ぜんげの長脇指ぞ
れり人大形い是王城ふ住人の有様今にてぐく昔と捨るぞ〳〵北野ふ詣で
梅をらし大谷ふ行て茶を〳〵折鳥部山の煙しふ五ふくつきの吸啜筒ふ者ふ
てたん毛巾着ひるびるこしたをのるこしたをのるこしたをの

今も――の僧丸帯をもて式正のものとす。紬組の帯は僧家までも用ひなるん既に利休の像と画くにも紬組の上帯と道服の上に帯とあるべし考説あり

御伽婢子 寛文六年飄水子浅井了意作 元禄十一年刻 巻之二に「天正年中越前敦賀に金銀をかゝ持つる商人一人れ男子とれてつあり其隣に住有徳なる商人の娘と娶く妻にさとべき約をなしそれ撃帯とそれ娘にもたりつゝ――にくく真紅れ撃帯とそれ娘にもたりつゝ――にくく真紅れ撃帯とそれ娘にもたりつゝ――にくく真紅れ

○名古屋帯古圖

按るにこれ寛永以前の古画なり當時れ童女へかくれ如ききり髪れかゝ名なり

○衣服い繪落ゑて紫革の足袋とゑゑゑ二百年前の古風眼前にあるが如し

○此時代の繪とゆのまさりるに婦女の衣服いとべて身ゑを廣くしろゑはゆゑゑゑり常れをせまゑれおのゑゆゑもとれひゑくといふゆゑあべし威儀のたゝかり表まりべし

曳尾庵所藏

○寛永二十年印本

張ぼみ物語 杏花園ゆ蔵本

富る世れゑゑ成ゑる糸ゑ
冬へ豆火ゑゑるでゆゑ
厚子の蕭園と打ゆて
ゑゑゑゑゑゑゑ

○又寛永より明暦の比の俳諧の句ゆ

ゑる火燒しゑるゑゑゑゑ
ゆてひれ樣と云ゑつゑゑ
かゝ樽の号ゆいでゑ
みゑゑん

○文明以前火燒ゆゑれ時代火鉢ゑて足ゑのゑゑゑゑ体ゑ窓れゑてゑゑゑゑゑゑゑゑ

繪巻ゑ載たり

調花堂藏

○かどやき ゆかべ 三

鰻鱺れ樺燒へ其燒ゑる色紅黒ゆゑく樺れ皮ゆ似たるゆ名れ名なりと諸書ゑゑゑゑい不審の說なり新猿樂記ゆ香疾大根といふ名見えゑゑゑゑゑゑゑ香乃疾く他れ鼻ゆ入れ謂なるべゑれゑ鰻鱺れ香疾いよく相當ゑゑる名ゑり鰻鱺と燒るゆべし

香疾ものハ又あるべしとぶやぶやぶと訓ス樺焼の字と當てさそ樺れ皮ニ似たりとの説
とぶべきけたるべしとふりに羽織の字と當てさぬぐ不審の説をいふべきなり新撰記ハ。茘
原明衡の作。後三條院東宮の所時。明衡白髪ある由の事
めれば。今文化十年より。元七百五六十年前の人。ものをいふべし。○今女れ言ふ豆腐をおくべと
いふもあれ言ス 饅頭屋節用 文亀本 衣食部ニ「白壁豉」かくれ如くなんそう。又 海人藻芥
ハ。酒ハ供神。酒ハ九献。餐ハかちん。味噌とびむし。塩ハもろもの。豆腐ハかべ。索麺ハほそれ。
松蕈ハまつ。鯉ハてり。鮒ハふり「云云」とあるなれど今大和あたりにいふもれハ九三
百二三十年前既にとあるハ異名ニ 海人藻芥 ハ長享二年の奥書あれば文亀より少し前ニ

○挑燈 四

挑燈ハ詳なるべ 古今夷曲集 客人れゆること送る挑燈いまいまけ給どいそ
月影 定家卿 とあるのもこれ此歌古書ハ所見なれど證とすべ 秋乃夜長物語
後堀河院れ法字ハ西山の桂海律師とかる人三井寺の梅若とかる児と惹同寺の
或坊ハかれ居とれ此児其坊へまゐり行とれ戒かける条に「ふけ行とれつくづく月の

西ふめぐるはちるもるる不よりて義れと式人れあるるれ千すれ書院れ板障ハ
より遥にれんぐれるれ上れ壹 韓垣戸 されふ壹くぎよなふのらやらんぐ螢を
入てそれ光とかるれ此ちどきん金紗もものとれんなるやるれるれるれる
てれすてれるれるれとれるれれれ

年号の下に数字をもて年号を記せるは年数をもとめんなり

諸書と参考するに 文安五 下学集に。燈籠。行燈。挑燈。とあるべし。

笹竜挑灯なるべし 文安元年に書なり 宝徳三 七十一番職人歌合に。みたち君。とある男。續松を持

しるべ。当時も挑燈と用ゐるべし 欽 享徳三 鎌倉年中行事 管領のもとへ参の

行列のもとゐる条に「續松二丁行燈一もつて参る」とありて挑燈はこれなけれども

当時もしるべきものなり。ひざり。欽 康正二 長禄三 寛正六 文正一 應仁二 文明八 尺素往来に

挑燈の名目見えざれども文明以前に用ゐるべし 頭屋節用に挑燈は名目見えず 此時代もとして篭挑灯なるべし 公節用集にはこれを文亀中の書なる証とす

永正七 大永七 或古記 大永三年の条に「門よりやうちん二つ」とあり 享禄四

天文十九 宛太記 天文十九年の条に「中間に挑灯とりもたせ」とあり 北条五代記 片仮本寛文二年刻 巻之八に天文年中挑灯の

云々」とあり。これ葬送に用ひたるなり。指物と用ひたるなり。弘治三 永禄三 当時は既に挑燈とあり。

甲陽軍鑑 巻之一永禄元年の条に「不断不可燃挑灯」とあり 又巻之十下。永禄六年

の条軍用のこと。所に「小荷駄馬一疋に挑灯二つ。ずつ結付馬負は一人

に一つ。續松なり」とあり。当時は挑灯はもつぱら軍用よりもひたる欽

元亀三 天正九 或古説に。永禄天正の比は篭挑灯も今世のごとくなる挑灯もあり

文禄四 慶長九 好古日録に。俗に云箱挑灯は――の時始て制す上下を藤葛を以

編たる板を用ゐる。慶長以後の事なり。天正已前は挑灯は篭に紙を粘して用ゐ 醒ヒ云

制なるべし 此説は右の古説と合せ考ればなる。挑灯は天正以後の物なるべし 元和九

寛永一九 正保四 慶安四 吾吟我集 慶安三年未得著 「思ひぬくやうづきなりし挑灯に月とともに行ふ

なるべし 狂歌あれども既に当時のごとき挑灯なるべし 享応三 明暦三 むさわづき

草紙に絵ありて竹にさしたる丸き挑灯とつけくはりとり今の高挑灯にたぐひたり

手挑灯のことなり 万治三 寛文三 訓蒙童子訓 寛文六年印本に丸き挑灯に柄とつけたるあり今ぐ

挑灯とふるなり如し 水鳥記 寛文七年印本の絵に棒にさしたる箱挑灯あり 俳諧夜錦集 寛文五年乾坤

猶挑灯とそれ月 保文 とあるなり。当時は箱挑灯を用ひるべし

延宝 延宝六年板 菱川繪本 に箱挑灯に柄とつけたるものあり當時ころもけてこれを用ひたりとあり 隠蓑 延宝五年印本 附録に曰ふ「扨りひの煙ところ挑灯」とあるこれを當時の懐中挑灯なりしなるべしさて當時高挑灯に丸き紙用ひることなりしかど提あり く提灯なる

但神事葬送ばかりに丸き紙用ひゆゑ元禄 天和 貞享 元禄 大 當時は印本は草紙の絵と参考すれば延宝ころ元禄はまだまだしら柄はつけたる箱挑灯と用ひす棒とつけたる箱挑灯とまれなりし 雍州府志 貞享元年 「文匣并挑灯之類悉張脱之」とあり

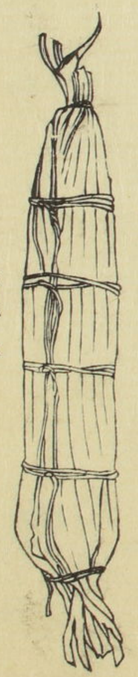
一代男 貞享三年印本 巻之四民家は婚礼の間に柄はつけたる箱挑灯と持ち行体とければ式正

ふも用ひたるべし 宝永 柄はつけたる箱提灯にてもこれを忘れしかば不便なりしなれどやはりこれをふや當時ころ棒とつけたる箱挑灯のごとく用ひたり 正徳 五 和漢三才

間會に棒とつけたる箱挑灯と出でり 享保 西川祐信の絵本其外當時は絵をかくるに棒とつけたる箱挑灯と用ひたりさて享保十七年は印本 万金産業袋 巻之一 挑灯は類とする条に「馬ちやうち 細書 鯨は弓とかける」かれは如くはこれとりて按に今弓張挑灯とつけたるは本名にて元は武家方に始まりしものなるべし 享保以前は絵は此挑灯所見なし享保以後はこれにあるものなるべし 挑灯とつけたるいでたるこころの今は弓張挑灯など便利なるかしこれにぐらべりらくは器物昔はくらべ今はまさるる物おやはり唐士に今はむ挑灯なりとは唐紙は性にはゆゑに挑灯傘は類紙とはて製とはなどは実に 御國の紙は万國にたぐひなるは至宝なり

○因に云蠟燭の事は 令義解 主殿寮に油火為燈蠟火為燭とあるこれは其来るは尚一 和名鈔 にもはこれは文禄は比異國ころ渡りて後此に製し始むとはは不審は説なり

○羽州松脂蠟燭圖



長曲尺八寸五分余

毎年巣に松脂をつけて蠟燭のごとくして燭台に立て火をともす挑灯の竹に筒に立て火をともすなり

粽に似たり

○羽刈籠挑燈圖

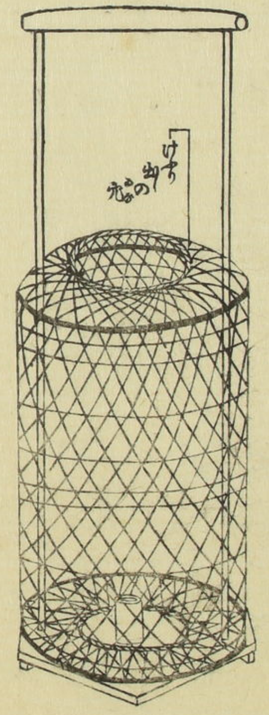
羽刈ふく今ハ不用ゆゑ天正以前の挑灯ハ古製とゝ
ぐき物ゆゑ形の異同大小も
なるべしものゝ所ハ得ざる
ものと雲のゐ。道に載る
ゆゑ臨いどり
古製ハ今に
のこれるハめづ

雲ハふるゐ

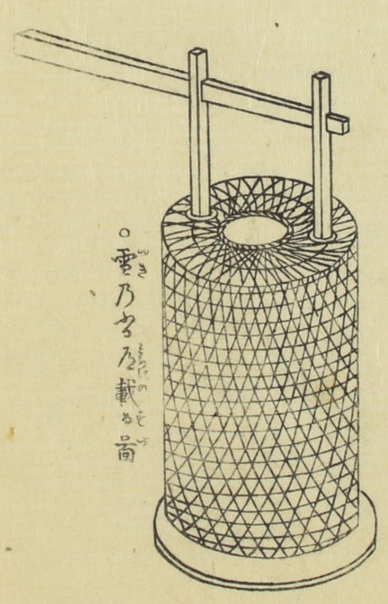
羽刈の臣家ハ
さまざまの糸に雲ハ張そふにつけて。
おりのとれをたゞもつくるもとむるゐ義ゝ。
月ゐ月ゐ紙をつくりくゝ
土蜘とゝぶさること火を。ゆゝく
極ゝ。やそをふまをふたくさゆゝ。
それふまこゝろ樣につくりそゝく。
さけあゝくたゝゝ。
わをひゝとゝ籠まで造り。
紙をあてゝてゝゝくなる。
ゝくゝゝくゝ
まれくゝゝ

○總高曲尺三尺一寸余
籠高一尺二寸余
もゝて裏ゝ紙と粘て
用ゆ

○籠と上へあげ火とともを
やゝにつゝる蓋ハ板ゝ竹ハ筒を
立て右の松やゝらゝそゝと
ゝる料ゝ



臺板六角

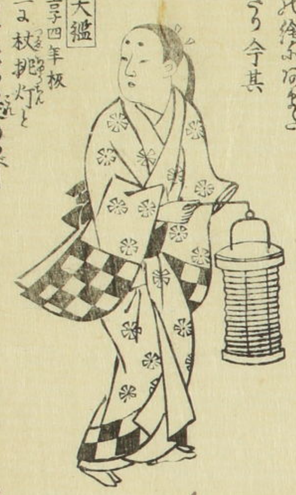


○雲乃字乃載る圖

○寛文七年印本
水鳥記
呼載

○當時ハかゝれ如く
棒乃なゝ箱挑灯

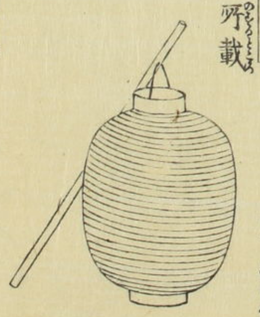
○延宝の比ゝろ
元禄ハ未まそかゝぬく
栖ハつゝる箱挑灯とゝ
當時ハ傳ふのもゝ
ゝゝゝゝゝ今其
一二と
ゝる
の



西鶴大盡
貞享四年板
卷之一ゝ杖挑灯と
いふ名ゝゝゝゝ是ゝゝ

○元禄八年
印本
婆繪百人一首
呼載

○寛文六年印本
訓蒙圖彙
呼載



今俗にぶゝ挑灯と
ゝふれに似ゝる

○元禄五年印本
胸算用
呼載

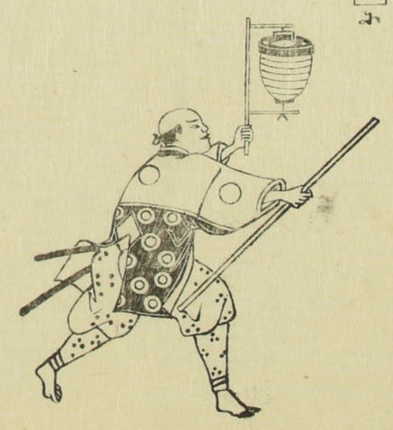
○元禄十五年印本
諸藝大平記ふ
此圖あり

○當時かゝれ如く
棒とゝ箱挑灯も
これハ今ゝ
ゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

○万治四年印本
むさしあぶみに載る圖

○宝永五年印本
諸士百家記に此圖あり
當時くゝり如る挑灯
用ひ来



○行燈 五

行燈は始詳ならず下学集に文安燈籠行燈。挑燈はくゝりべ出し鎌倉年中行事に貞和元年。行列に續松行燈を持せられるとあり按るに行燈は元家内にもとゆ蛍物にのみ用ひ續松は便利ゆゑに灯火をおほひして風をふせぐを持ちゆく為に造出したるものなるべし然則字義は行灯と解何曾ぞ傷の察い庵に物ひそれい鈍にされどなんどとあるが古言なるべし

下学集に行燈とは紙つけたる後に上木をくる時乃ちなるべし貞徳乃御傘

玄峰集 佐見鐘木町炬松をくゝりべとなり古風なるべし

紙で来る鞠おかる疑ふ月花　嵐雪

くゝりべは鐘木町なるべし續松を用ひ元禄比は行燈をそなへもちひたるなるべし

絵草巻は五に云。古老の物語に今は世にいる調度ゆゑ皆ある事はやれなるべし

なふあるべし行燈なるべしあれども今は如く蝋手と中に弱い近きゆなり昔は路次行燈は如く底板に灯臺と盆なる成遠州にも丸行燈のそなへそれも角なる行燈にも臺と中に弱ゆ始まり」此説は如く行燈は古製に今茶人の用る盧地行燈と

ゆゑ民家に端近く風をふせぐゆゑに灯火おほひするが便なれども後に燈臺ふかくく用ひたるゆゑなり

物と見て知るべし其製作杖歩くゝ便りゝ

元家内ゝ見て造出し

遵生八牋ゝ有柄曰行燈用以秉燭ゝ唐土ゝ行燈ハ此方の

挑灯ゝ

元禄二年印本

本朝櫻陰比事

所載畠

当時近き所ゝ行燈と用ひゝ今諸国ゝ行灯と称行ゝ用ひゝ不れゝ所ゝ二十四五年前ゝ上野ゝ旅行せしゝ一の宮ゝ辺ゝ行燈と用ひゝ故ゝ京都ゝ行ゝ

これとゝりてゝ彩色ゝ

○今茶人ゝ用ゝ露地行燈とゝ

あれゝ似ゝ

○笠ゝ下ゝ布ゝ垂

秋齋間語 宝暦三年印本 巻之二ゝ享禄二年ゝ古画ゝ載ゝ左ゝ如ゝ今案ゝ主人ゝ女ゝ被衣ゝ

布ゝ須ゝ

ゝ市女笠ゝ見ゝ

ゝ下女ゝ手ゝ

ゝ一ゝ

職人歌合ゝ女ゝ頭ゝ布ゝ

秋齋間語所載享禄二年古画

享禄二年ゝ今文化十年ゝ二百八十五年ゝ昔ゝ當時ゝ女ゝ風体ゝ

ゝ市女笠ゝ

ゝ見ゝ

ゝ

ゝ

○寛永時代の古画に此圖を載せたり

笠の一枝の故繁と

下

○婦女の編笠塗笠 七

婦女の編笠塗笠とはいと古くより古き繪巻ものにもとり近古も女の面とのこれと笠と裁き又は覆面なりしより賤の女も面とのこれあり歩行いまれあり寛文の比までは女の編笠塗笠いと深くて少しも面とのこれ素なり。寛文二年の印本 江戸名所記 などの繪にもとんても考へあり

獨語 ふる。江戸の婦女外へ出るに昔いきまして黒き絹にて既面とつくり目ぐらを

あらはるる其後絹にて既面とつくり宝永のころまでもありき

女子出門必擁其面

毛吹草 維舟撰。正保四年刻

花笠とり笠とつくりみり 元弘

嵐山集 慶安四年。令德撰。明暦二年刻

紫乃 後面 良保

接るにひるハ紫のあやをとるなるべし

○本花園藏本 寛文二年印本 要石に所載

京山摸寫

○詞花堂藏本 天和四年印本 菱川の繪ま 此圖あり

○これ既に古圖と教考するに寛永寛文天和の比までもかくらふ本とられて

これなかりしに享保の比乃遺風なるべし

老女の寒気を

著る女の面とかくれ

料なるべし

笠の中とかくと

きくなるべし

幕けく　延宝六年刻

（附合の）ふくめんなり笠　志ぐれ乃秋　松意

二代男　貞享元年印本　巻之五ふ云「四十七八ゐる嘸ぐるしくる露草色ぬ布子にむしゝゆ笠ふくめんぜこりれ袂を付て子ゐ紅綿帽子ゐ寺れ礼扇と持そ云く」とりえそれく貞享れ比ろ塗笠ハやうそゐる故

女用訓蒙畫彙　元禄元年印本　巻之四ゐ「人ぬ心のいろ深さもけゐる衣紋伊達姿真性れ菅笠や〳〵帯ゐ追風ゐのうれ苔こなりこれゐ都女郎云く」かくもて元禄れくゐめ菅笠と ゐうかうゐるゐん

其代衣　嵐雪撰元禄三年刻

菅笠や男若弱なる花乃山　百里

当時ハ男れ菅笠ゐりたゐ似合ゐうぎゐ故

俗ばれく　元禄八年印本　巻之四ゐ「四十ゐ云ゐる女れむゝと今ハ兵庫曲おゝげゐ浅黄ゐうゐん裏れ下ゐ云く〳〵ゐ華足代衣よりえぎの紐をつけゐり笠ゐめつきれゐんとゐそゐて元ゐ赤いもゐ然ゐろびいやゐるとゐゐ云ゐ」

当時ハ塗笠ゐ足代衣共ゐとゐく古風ゐゐゐしとゐゐゆ

同書　ゐ水口れ八兵衛ゐれ木地れ下ゐら笠ハ千もゐゐゐりの紙紐と付ゐる代当世拵ゐゐり○安永乃比昔ゐゐりてゐゐゐ笠と

俳諧日本國　元禄十六年印本

（附合の）九紋竜ゐ塗笠きれゐるきゐゐど　堺　友重

是笠ゐも当時塗笠れゐゐゐる一證ゐ

松の葉　元禄十六年印本　ゐり笠ゐゐゐる獨吟ゐ「ゐゐ笠。七紋ゐんゐゐ。ゐけ笠ゐゐゐてゐゐゐれ。ゐのゐれ笠ハ。ゐゐこの。ゐゐゐ。ゐゐゐてゐゐゐゐ。きゐゐゐでゐ」これ老れ和泉と同ゐ一ゐれ笠ハ老女れゐる和泉ゐ女ハ菅笠ゐゐゐゐゐゐる一説ゐ

花見車　元禄十五年印本　松蘿館藏本

初笠やふくめんなる女ぶれ　朱拙

和漢三才圖會　塗笠　用薄片板紙張之漆黑色出於京師及大坂　同書　越前國土産之部　塗笠出於戸子　我衣　古老れ和泉と同ゐ一れ小児れ塗笠ハゐゐゐゐて内ゐ菊ゐ云　曳尾庵藏本　牡丹　梅　椿　水仙　桔梗　燕子花　等と画ゐり紐あゐゐれ紐と引通ゐゐゐ笠云く」

○寛文二年印本
江戸名所記
所載

○石だたみ
丸やなり

孔雀楼筆記ふ
昔れ女服ふ石だたみ
うろこ形れ
地無
小袖お
まるすり

同書
所載

○當時べ
塗笠
編笠をもよ
ぶ〜女れくら巻
をるへ方れこと
昔れ礼儀なり

○反故堂不易延宝時代れ
雛れ小屋風れ
絵ふ
図
なり

○延宝れ比いの笠ゆり笠
のくすりれくれ
笠れ下れくく
ものとうてれそと

○貞享四年印本
武道傳来記ふ
載る図

○女つれ女
きくく頭巾をかぶる体ふ

貞享の比の
繪ふ此図
あり

○これときくく頭巾
のるひきあ頭巾をもいう

○其角ガ
五元集ふ
目ざりてきあ頭巾れ浮せうか

○七車集 元禄八年撰
前句
付句
氣まり頭巾のまろ髪加
琴風
キ角

○天和四年印本菱川師宣れ
絵ふ此図のり當時のくれ
綿そ頭巾くつ〜
中年れ女又老女ふ
おわくもえ
より

○物類称呼ふ
綿帽子
江戸ふてでそ
しのい堺ふそ
こうん像といふ肥後そ
てがそくふ腰巾れ
しふり。醒こうれ製作れ形ふ
まれる名なり。又ものる物ふ
菱川れ絵ふ〜ん少年れ女
巾れ方ふ方ふる体と多く
ふかけり見ふ〜〜れた
絵にもかぶ〜ばくれ
ますれ〜〜て手細と
いふ〜る〜〜腰巾と手細といふも
とれ〜〜紀本と細本と
謂なり〜〜ふ〜〜紀本と細本と
いふ〜ひなる〜〜

大和名所鑑
所載

天和貞享
元禄れ比れ女れ編笠れ形ハ
寛文延宝れ比〜いく変るとる〜
當時ハあく笠とうりかくおくいふり袖れ
少女ふ菱川れ絵ふものまふとうゆふれと
小女郎手〜ひて男子もうふ上り又一文字と
ひくく形ふこれる名こまさうれ〜〜
面れ〜〜ぶるやうれをる紙をべて伏編笠
〜〜ふり

宗一本ふ
れやうそ錦笠とふてうりふ〜〜
見えうり又編目れ細密なると目狭と
称どいくゆる伊勢編笠ふ

○元禄二年印本
本朝櫻陰比事
所載

○元禄中ハぬり笠まれて形ふ
やれ〜れをけ笠と
きうう

和漢三才図會ふ見えうり
これハ男子れ笠ふ

○桔梗笠

八

天子草　寛永十年刻　桔梗笠　德元
毛吹草　正保四年刻　桔梗笠　吉政
玉海集　明暦二年刻　桔梗笠　喜雅
口まね似草　明暦二年刻　桔梗笠　作者不知
物忘草　明暦三年刻　桔梗笠　蝶ニ子
狂歌集　寛文五年撰　以上六部狂歌堂藏本　桔梗笠　作者不知

右れ如くふるゝ紀俳諧れ句集ゑ桔梗笠ゝゝる句おれれど當時おくるゝれる笠ゝむゝゝおりひぬれどいるゝ形れそのゝも考ゝざりしに左の古圖と得て其形を知ぬ。又山れ井　慶安元年刻著作堂藏本ふも「桔梗笠ゝゝゝのれど花れ乾ゝくせゝゝ人目ゝぶれ草ゝれるゝゝいのゝ云ゝ」ゝゝゝゝ○今も羽州秋田船越天王れ船祭ゑ左れ圖れ如き笠とゝる是桔梗笠れおごりゝゝゝ

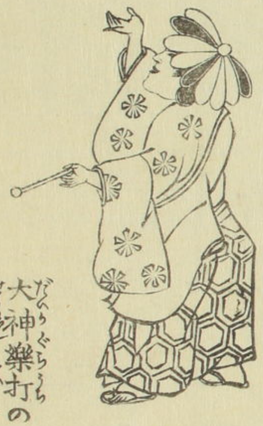
桔梗笠古圖

貞享の比の繪ゑ此圖ゝり
大神樂打の体ゝ

元禄の比れ繪ゑ此圖あり

此二人美少年乃男子の体ゝ

天和貞享の比れ幼牡乃繪巻のうちふ此圖を載たり笠い青黄赤一間ゝゝゝれいろゝゝゝ



大神樂打の少年の体ゝ

○浮世袋再考 九

要西

沙金袋 山本西武撰 明暦万治比刻

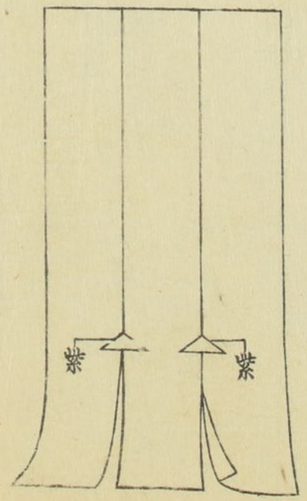
扈たく浮世袋や年〳〵の

此句をもて考るに浮世袋い勝れたぐひなるべし **秋齋問語** ふ云「昔太刀よつけ火打袋と三角よ縫ゆゑふ紙子よ火打の名なり」此説ふまれど三角よ縫ふる火打袋れ遺制ゆえ浮世袋ひとる業ゑれと見えつ

ひ〳〵ゆ浮世袋ゑ三角ふ縫ふる火打袋れ遺制ゆえ浮世袋ひとる業ゑれと見えつ

なびさるゆゑれ名づけたるかゝ **卵子酒** 宝永六年著 巻之三よ。昔九軒町の繁昌したる事をゝる条ふ。発が浮世巾着ゑ物と扱ひるよ。これも浮世袋と同物ゑ後ふ考ゑも称しなべし

○昔は女ふの布着よ浮世袋とつけしゑふ此号れ下くゝのつゝみれ縫ふふ革にて三角れ形れ如と古重ゑ袋れ形よ似ゑゆゑれ名ゑれ也ゑ堺れつけるふ浮世袋れ如きの名ゑれ也ゑ堺れ



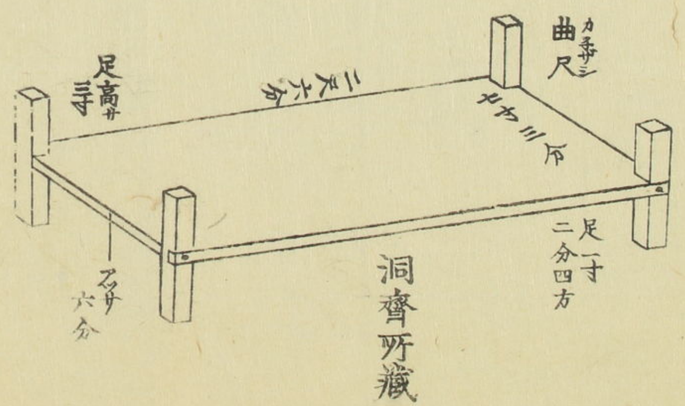
本朝俗諺志 延享四年印本 巻之二ふ云 「今傾城町れ腰巻ふ紫れ乳と称ること乳安れみふ」ゑ云へり

延享れ比ゑ也ゑ也ゑ也

江戸室町の横町と浮世小路といふも昔浮世絵浮世絵師などゝ名ゐ[illegible]今も其たぐひの商人なれどなり

○奥板の古製 十

文明時代の酒食論に画巻又寛永時代の絵に此奥板のことをこれ式正れ[illegible]奥板の一種乃古制なるべし今も京都の舊家にまれにのこりしが好事の人文墨なるべしてもかるものなり又甲州の民家にも今もこれを用ゐるに表にて奥類と裏にて裏類と称する便利なるものなり



洞齋所藏

○大津繪の佛像 十一

元禄四年芭蕉粟津の無名庵にあり一時正月四日に

大津絵は筆のすさびに何佛
口とゝめ給へとて古い仏像を画くと云ふべし当時は大津絵は仏
を持仏に掛る出れ[illegible]ゆゑに[illegible]
なるべしされどこそ當時左れ[illegible]

俳諧日本国 元禄十六年印本 杏花園藏本
前々附々 前々不知 大津絵は迴向にて弥陀[illegible]
本朝諸士百家記 宝永五年印本 巻之八に云大坂長町七丁目に国扇屋善三郎しるす出なり此出
れ裏店に嵐関しるせいる七十有余れ老法師なり中畧写半ばかりれ棚を設て大津
絵の三幅とけ一首の讃に

絵ゐやくも末にさゞめる弥陀い弥陀未来れてこゝかけくるのまね

○又享保十一年竹田出雲が作せし伊勢平氏年々鑑に浄瑠璃と大津絵の十三佛といふことをうたへるに宝永の比までもかの仏絵を用ひ享保比まぐも世に散在せしものなれど今はうせてなまく或人れ所せる絵摸しくたるにのみ世

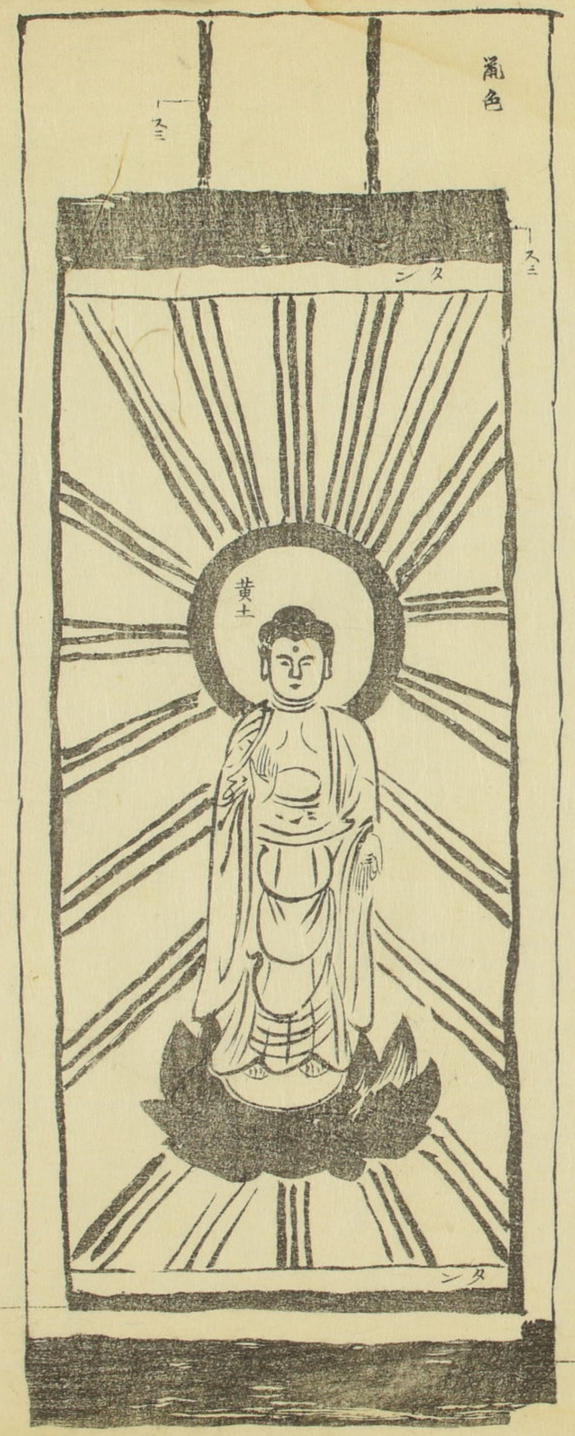
但今も大津に仏絵多れ所のまぐれども昔れしいさくたぐり

○因に云 一代男 天和二年印本 詞花堂藏本 巻之三に寺泊れ傀儡の家れさまといふる条に「扉風乃押絵をうまでに花ちげく春毘ありれ人形板木押の弘法大師嵐れ嫁入猛金国右衆の多門庚左衆門が連奴これらか大津追分ようてくさしものぞうはんに都かつくるふ云く」かくまで天和れ比い戯子絵ともかきーかうべー

○又 五ケ浦津の草紙 刻板れ年号詳かしがたし 巻之四に「法虎梅竹左字に去くる枕屏風追分絵れ奴が髪の命と君ふたれべいと赤紙丹にて去くる所後ようて云く」とあり

案るに天和貞享れ比なるべー

巻に絵と云ふ今は昔と失ぬるものいと大津絵に昔を失ふ物なり第一去くる女れ髪の花かんざうも古とちり塗笠れ糸と考ふべー



大津繪佛像縮圖

總長曲尺一尺七寸
廣七寸五分強

一枚の紙ふ上下中。一文字。風帯。北形と彩色よ
ちとけて掛軸よちくるりの効り

頭と両手へ木ふりて印一外へ筆ふて
ちくちくとろも薄墨輪後光蓮華坐ちよ
丹蓮華ある。

芝峯軒所藏

北清縮図

同三尊来迎佛

ころも黄土。輪後光丹。蓮華丹。縁青。雲朱墨。す尺おやも。林前よおゑ。

尚志堂藏

右れ諸士百家記よりえらる嵐関とりやげ狂歌せ〜三尊仏も此さびあり〜

元禄三年印本

東海道分間繪圖所載

大谷れ所ふ佛繪いろく有と

さるより芭蕉れ大津繪れ句ハ

元禄四年おもてこれ〜ふ

一年さきの板行多り當時の

おもうけ目れまへふうびて

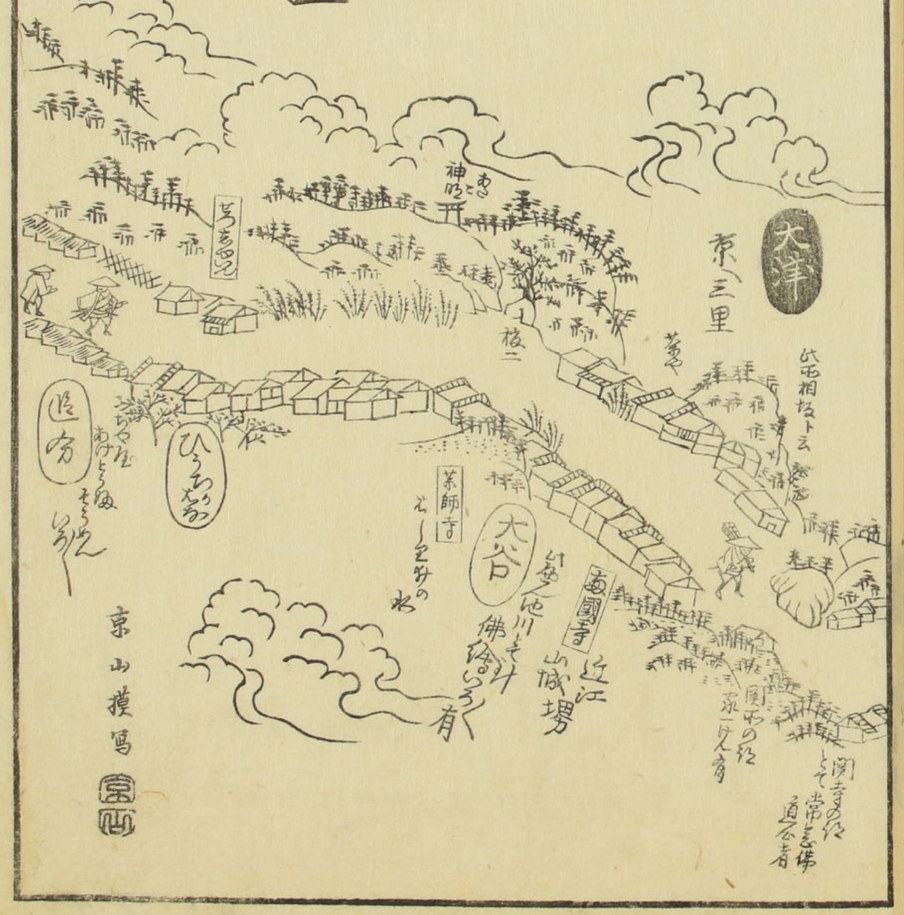
まぐろふ孫〜

奥書云

作者 遠近道印

繪師 菱川吉兵衛

元禄参年庚午孟春吉旦



○浅葱椀 十二

昔浅葱椀とて物ありし 右之双紙 慶安二年印本 巻之上に青き椀ふくとて糸にて「ろくゝ」
椀の内打ぬきたつれとんぬきぎこと云と」とうたへられて慶安乃比既あり」物ありし
雍州府志 貞享元年 同三年上梓 土産門に云「二條の南北新町所製。縹椀とて。黒漆に上縹
色并に赤白の漆を以て花鳥を畫云と」 原書漢文 今かゝきん てゝて其制作と知るべし 三代男
貞享元年印本 巻之四に富る老の事とて糸に「京ひとを紐とおもふく椀の静なる向ひ
浦に下屋敷二百人前の浅黄椀三町をとり牡丹畠をとゝ我ら此自由に花車に素
てなりき鼻も人ふるまを肌も夢見ぬく居てもゝ云と」ひくゝまで淺黄椀に下品乃器おい
なりざるべし 俳諧糸屑 元禄七年印本 に浅黄椀と出たれど當時もてゝふ用ひる器なるべし

晋子十七回 淡之著 享保八年刻

前句 子ふもんでしとなのむまを生 竿秋
附句 名ふも似ぬと好きこそ出れ 淺黄椀 香点

御仰名題紙衣 元文三年印本 巻之二に浅黄椀れるゝを元文の比までもなりし ものを
今はうとく名ざふ用ゐぬるのなりしを昔りなる用ひる器れ今もてゝるものを
いとおかし

○重箱硯蓋 十三

或書に重箱は慶長年中重なる食籠よりとづくて始て製造」と」とうけ
べし。今按に重箱は衝重の遺製なるべし 衝重れ制なりて縁高とも縁高れ足と
なりて重なると重箱といふべし 古重箱に着物を着物を組入る飾と畧なるものし 衝重に
着物を組入る飾と畧なるものし 衝重に絵ゝ おけるゝ絵れ号なる
ゝ 但食籠れ号は重箱なるべし 古制れ食籠はかるものと 下学集 文安
衝重。縁高。食籠」れ名と出るく重箱と出さど 尺素往来 文明 に食籠ゝとゝく重箱
れ名見ぬぎれど出るゝ右れ或書に重箱は慶長年中始てつくりしとゝけ
べしゆゑ既に文亀本れ 饅頭屋節用 に重箱れ名目見ぬぎれなるゝ能乃

狂言に菊の花をよめる「時ふるもとをも先盃と打くゞまれたゞ一つたべよと存ずる」とあり。又鈍根草にも「宿坊にて門が[illegible]」とあり。能の狂言のふるきに前にもたびくいへる如し。さて寛永比より元禄比までの古画或い印本に絵などと参考もるに酒宴に肴と盛器に[illegible]て重箱に松檜草花などのふしきとしく盛り食籠[illegible]ふるに今の硯蓋にふるものいと近年比造出るものにて十ばかり絵に重箱にて硯蓋なり

○元禄十七年の印本に絵に重箱にて硯蓋なり

卵子酒　宝永六年作享保七年板に絵ふる硯蓋なりて重箱も交りてあり

自笑に草紙　宝永七年板に絵ふる硯蓋のごとくにて重箱なりて後

西川祐信ゞかける印本に絵などに硯蓋のごとくにて重箱にかゝれ[illegible]

[illegible]れるに重箱に肴と盛るに元禄に末よりすれて硯蓋に盛るに宝永年中に始まりしとおもふ　但硯箱の蓋に菓子載るゝ古に記録或へ歌集にふるに

山の井　慶安元年印本　巻之五に新黒谷に花見の事とある条に「のやゝ硯箱やうに拍のかゝ[illegible]」

硯箱に蓋に肴と盛るに[illegible]

硯蓋に式正に用ゆる家にあるに今民家にて正月屠蘇酒に肴と重箱に盛

い宝永以前に古に残るなり

三足猿　文考撰上梓に年号なし　按るに宝永比なるべし　著作堂蔵本

附合に菊に香に菓子に硯蓋　菊小

硯蓋に菓子を盛るに近世に[illegible]

本朝諸士百家記　宝永五年印本　巻之五「云こかんどのとりつぐ[illegible]」

[illegible]に食器硯蓋に干菓子をづたくりて。結の一ゆさやうにけりてうんさく」

[illegible]に硯蓋に干菓子と盛るに[illegible]

肴と盛一種に[illegible]宝永以後に半なるべし　今さ[illegible]に造る

硯蓋し称ス原とうしゐ

○二足三文 十四

今物は價の安きを以二足三文といふ諺い元金剛は價ろ出ろ

刻梓の年号なし寛永の昔しとさぶむべき徒ゆり杏花園蔵本 下之巻ゑ「金剛でんこそ二文まるものと云く」とある

狂歌を載せり金剛は草履はきぶひたなり。藺金剛。藁金剛。板金剛種こゆり

きのふけりゑ乃物語

○三線鼓弓は古製 十五

松は葉 元禄十六年板ゑ。永禄の比琉球より蛇皮二絃は楽器を渡せ泉州堺の琵琶法師中小路ゑ者一絃とまして三絃ゑ世ゑさみせんと呼寛永ゑいさるまく盛ゑ

なりしかるに寛永正保は比の古図ゑ永禄ゑ寛永ゑ

いてそまづは六十余年ゑれど古製を存じ今と大異こいづれの比ゑ古延にしる

名匠出く今の形ゑたりてそ○鼓弓は古製も左ゑ出を

○元ゑ三線は主ゑ三線はのゑ今のごくゑ

撥は金と見ゑり元琵琶法師はゑ

寛永正保は比乃古画なり三線の古製とうるべし

美少年の男子の体ゑ

海老尾の形琵琶ゑ似たり今と大異ゑ

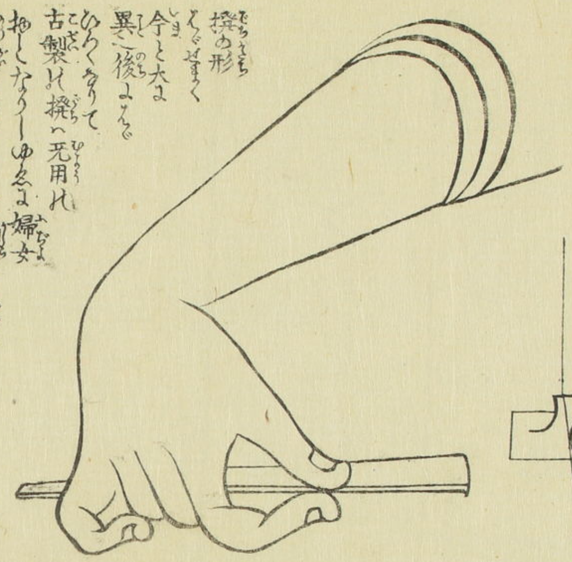
万治の比も

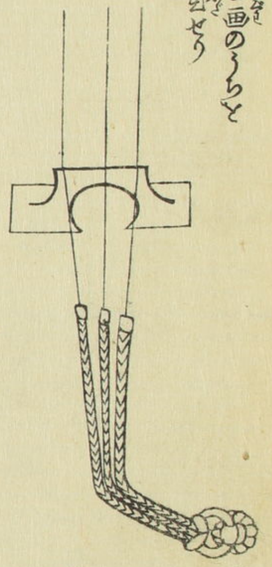
万治年間印本東海道名所記所載

京山摸寫

寛永れ比の古画のうちと撮要して撰出せり

撰の形
今と大さ異し後よりひろくなりて
古製は撰に元用れ
おしなりゆゑに婦女
挿枝れかうして頭にさすより
しかく説なるべし





○寛永正保れ比れ古画なり
鼓弓れ古製
とんとんべー
脚たく
弓短小にして
今と大さ
異し

和漢三才図會
鼓弓始て南蠻
渡れ古製蠻絃に近し

○根緒さゝふ鐶どつけてうくれも今と異し盲人の撰に糸とつけて此鐶に
ひもびつけて用ひしいと
昔れ質朴をわすべし

○紫革足袋 十六

和名鈔 今按。野人以鹿皮為半靴名曰多鼻。豆用此單皮二字乎 ［とも］

足袋は革うく製るが元なり。昔應仁前後ハ貴賤男女すべて革足袋と用ひたり文禄乃比れ古画とみるに小橋の紋なる革足袋とうとうなる男子なり紫革乃足袋を女子ゆゑ用ひるとゆゑとせり 註文乃うちに

室町殿日記 十之巻。長一の奥方に用ひるとゆゑとせり

「一むらさきたび ひもいろくれなるうちぬ付ひと 十足」とうとうとこれ天文の比之當時はきくれ婦人も紫革の足袋とうとうとも

獨語 「我もとしき者の中に慶長元和の比生もてるの男ゆゑ女にもてて寛永れ盛にて絶とり」とふに男は冬革のうちかけ革れ袴と美服にして女は紫の革乃襪子とうとくをとき

けるとうとうとその襪子は我とうとれ時天和の比ゆゑもてものとてはのとりて」とうとも。

又 充之双紙 慶安二上之巻に紫れ物乃ふくとうとる絲に「童」「人なりるゆゑ紫麻乃小袖きくうとと紫れとて」「革紫たびとうとれとうとこれ」かれを寛永慶安れまろい

紫足袋とりくろ用ひたりしとも

都風俗鑑 延宝九年板 杏花園蓋本 巻之二に云「足袋は白革にて紫たびとくくりのくろと氣のしれぬ法方」云〻

あしし物語 一名女五經 延宝九年板 に云「たびを白かわ」はもとくれへもさし」とあれど延宝比よりてハ紫足袋やもとくれるなり〻○貞享三年比印本に。老女比事とのくる条に「芋桶れそころ紅の織紐付し紫比革たび一足つぎくの珠数袋云〻」

西鶴織留 貞享の比の著述 正徳二年印本 巻之一に。ある老女和のもの〻若き時比事と語る条に「我等も婚ごんハ花色深乃ものきる物に紬の帯一筋そ姿と作りあ左振舞の時も淺黄ちりし菊の絹比物ゆらんの帯紫比革足袋そ花とやりしに云〻」とのもとで貞享の比よりてハ紫足袋とくくるものなりしなり〻

我衣に足袋の事といふる条に「寛文の比まで女ハ紫革かどくそこらく俗長一白革淺黄革比なり細いもろ志ゆもとろもん也ふ〻一足もそ一年もこれるまで用ひこり天和の比より木綿比畦さしの足袋んやる云〻」今彼是と参考をるに紫足袋ハ天文の比より寛永慶安比まで あるるもとく延宝天和の比よりこれるなり〻

翁草 巻之五に。昔ハ男女ともに革足袋と用ゆ明暦比後革の價えるくなりて木綿足袋と用ゆ」といふもそれど〻

拾遺抱海 寛永九年印本 富る老比事とある条に「三る鞠ざし比木綿たびと頭巾で顔かくし云〻」とあれど寛永比も木綿足袋ありたるなり

○九ぢくしの文様 十七

慶安より万治寛文比女の衣服に九尽し比文様おこるもてる

山の井 慶安元年刻

秋乃野比井し幾比毒や九ぢくし

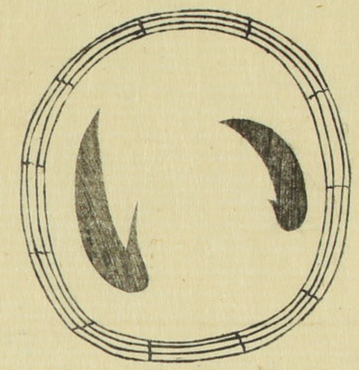
崑山集 慶安四年撰明暦二年刻

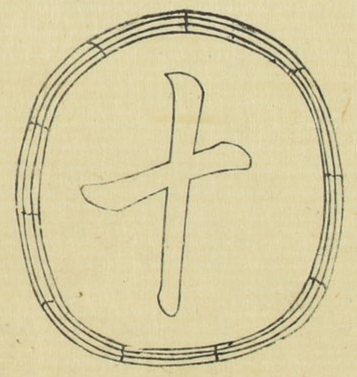
花くもるる日新や九ぢくし　安明

新續大筑波集

新うつる国毎比月や九ぢくし　品芝

万治寛文の比と盛ふ行なる江戸三浦屋に名妓薄雲身まかりし後其業かれなるふ袖と卓圍
をつくりく出生れ地信州嵐宿に或寺に寄附しるが今まあること或人其文様を二ツ
臨して予まのこるる公左にわくさり是又万治寛文に比丸ごしの文様にあるかれる
一説之



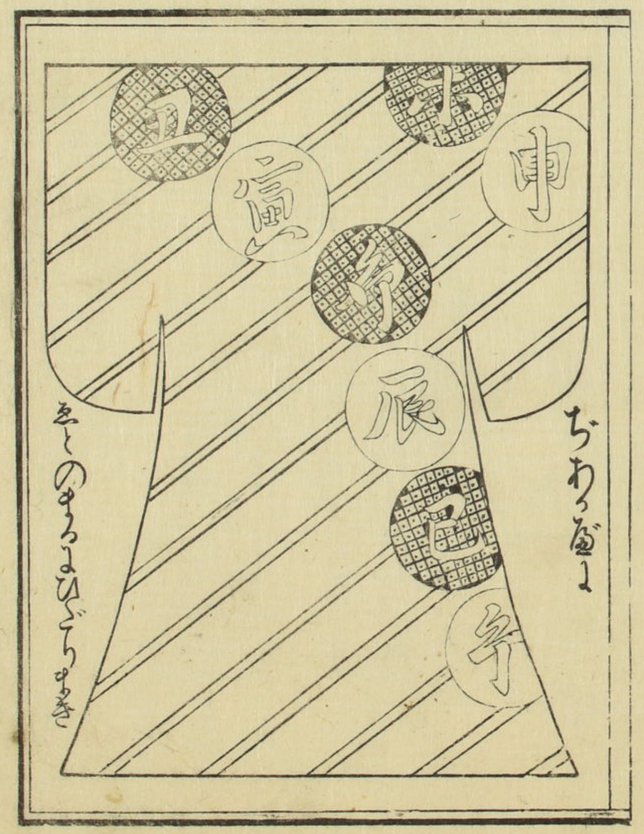


地緋綸子。紋紗綾形。総文様丸に ちふいろは 四十八文字。并ひ一二三に 数字を
ぬくり。丸の廻い白く染ぬき。文字い黒紫萌黄等に色糸をとりてぬくり。丸のめぐりのぢちん
金糸をとりてぬくり。丸ふ大小異同ありと雖。

丸尽文様雛形二種

寛文六年
印本
新撰雛形
所載

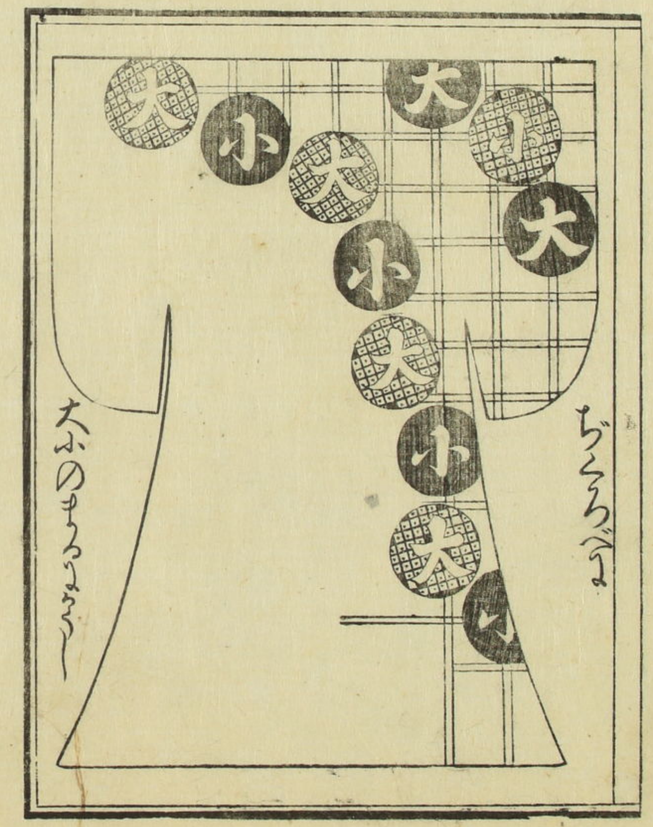
瓢水子淺井
了意ノ序
ノリ



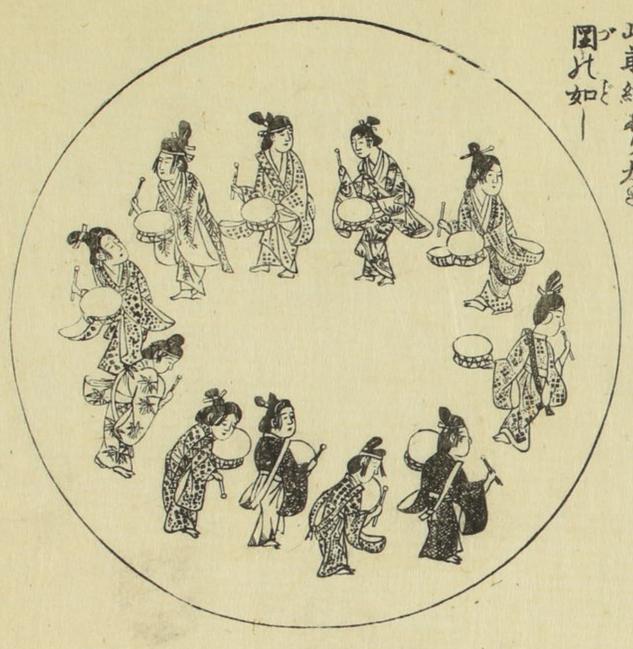
同書所載

右は草圍と此雛形と符合するとも其の流行とも云べし

○天和貞享は比の印本女重宝記と云る巻の一の巻み「友禅染は九ぜく〜云々」とあり これも一證〜とべし



○題目踊図時繪香合 十八



総て沃掛地に蓋は面に此時繪あり大さ圍は如し

按るは是寛永時代は古器なり洛北修学寺村或は松が崎等は題目踊の名なるべし扇は舞なるたとへは丹前節なるべし

松の葉 元禄十六年板 巻之一 三絃鳥組は歌

「京でも一条村屋が娘四ツ割帯とたとへぶかけくいうふも腰がちがうやうに」

則是なるべし これいとゞめく三絃は本手組しらふもの作り出せ 時は歌うたひ

寛永は時代ふるくもろ少女ひとり髪とられ髪とむとびとちも死とゝなる情も

なるさとりなり寛永元年より今文化十年かいさりておよそ百九十年ふべし

山東庵所藏

○祖父祖母之物語 十九

異制庭訓 遊戯の事といふ条に「振繋・石子・礫打・竹馬馳・編木摺・文字結・文字書・書占・何曽・宿世結・宿世焼・祖父祖母之物語・目比・頭引・膝挾・指引・腕推・指抓」つくりべ出たり。今按ずるに戯は擲石は和名鈔ふんえとされど古代事勿論なり又西行の歌に「石ゆゑはみのゆゑなるなにもそなるはしかりやいとる」とあり。これ今云手まり之。文字結い花結ひたぐひ歟。書占い歌占のたぐひ歟。宿世結ハ今云縁結ひなるべし。祖父祖母之物語い今童れいだぐれ目比い今云みつくりくべ。長門本平家物語ふ見えたれど古代事勿論なり。前にもいふ如く異制庭訓い元亨釈書の作者虎関和尚の作そ庭訓往来より前に書ふ事なれ来ること尚しるべしこれのふりべ童遊れ原とろかれど古き事いとかりかりく考へて追書もべし

イニ文字結トアリナルヲ考

○辨疑書目録ふ。異制庭訓い玄恵法印作。元遊学往来と同本ことなれ誤ん。

元禄五年板の書籍目録ふ。虎関作とあるが正しからず。其故ハ。往学往来ハ玄恵比作ニ寛文二年印本ことと其文異制庭訓と異なるべなり。或人云異制庭訓といふ本名ふいかるべし。玄恵ハ庭訓往来ふ作れく後れ名なるべき故。去れども本名つくりべれど。志ら新べし。

○源平盛衰記 巻之三十四 鼓判官石四ッと拾て一二と突とふことをえとう。石子ハ童遊の考これのくふ考べ。別録ふ。

なるべし 小大君家集 俊頼朝臣ハ散木集ふ。石ゆとりの歌ふ。

○拝游無木 二十

遊学往来 少性こ 挺・鞠・蹴・弱木・拝・礫時・獨楽・廻・抱・独・石子・拝・拝・小白・拝・行・言・業・小車・指・戯・為・拝・法学・遊・彩・点・終・未・能・老・「」。拝ハ俗れ弄乃字ふ。世拝・拝ふ。今按ふ。伊勢の御神事ふ。楽撃ふ。手とうれて謳歌ふ

ゆゑん。此名目童話おうり。また打ちてうちうちゆゑ戯と。拝遊とゆゑ。○無木と
ゆへ。撃壌れ事ゆゑ。東海道そい。もぎ。ゆゑ。東国ゆゑつき。ゆゑ。めきこ。
つとそてつくゆゑ。むきゆゑ。もぎゆゑ。むと。めとも。音相通ゆ。

○くれごゆゑ形のちひさき木と地ゆ立。ゆゑ形れ木と打ちく打つる戯ゆゑ。
題唐土ゆも書くゆゑ事ゆ。三才図會に云「以木為壌。前廣後鋭。長一尺
四寸。闊三寸。其形如履。脛節少童以為戯。特先側一壌於地。遥
於三四十歩。以手中壌。擿之。中者為上」又見干風土記。此方東国ゆ。めき。ゆゑ
戯ゆゑ、ゆゑ。和漢ゆゑ。戯之。和漢三才図會に撃壌ゆ。げきゆゑ。假字をつけゆ。

遊学往来の無木い是ゆ。

○打出小槌　猿蟹合戦　二十一

異制庭訓ゆ。祖父祖母之物語ゆ。むゆ。むゆ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
とゆて名目ゆゑ。童れ昔ゆゑ。いとゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

承云云」とぞ云ふ。是則酉陽雜俎續集の。奢色ヲ得さる金椎子と。和漢相似る談之狩衣よりかれみの中納言入道殿の御ものがたりに。かれみの少將の宝物集ニかれみの少將の。今侍ふべし。○又猿蟹合戰と云童話の原しるしきゆかり義楚六帖二十云。根本雜事云。有隱人在果樹下坐。被猕猴擲裸破額忍之不報。後有獵者與仙人為友。来在樹下坐。擲如前獵者怒射之致死。佛與天受。かくこそあり。按ニ猿蟹合戰の話。此果樹と根とそなはるなり。童話の原とさだめたる。仏説なり。或ハ國史物語ふるき或ハ漢土ノ故事ニもとづきたるもなり。かゝるこゝろなり。況女勸懲れ一助ならんもなりとぞ。かゝるこゝろなり。人の作り出したるものなるべし。虎關和尚の異制庭訓。今文化十年ニ至る。五百年前の書なれば。祖父祖母の童話ハ知ることなりなるべし。五百年前ハ童話唯童ハ考と刻もべき志なれど。こゝ思ひしるべし。

仏与天受ノ四字語ヲナサズ追テ根本雜事ヲ可考但シ天授ハ提婆近多ヲ云名長集ニ見エ

散木集

ふとき幼きちまきの児のちまき馬とりもちてとそ

「ちまきの馬いくばくしきいぞ」似ル

ちまき馬きうりの牛二十三

承源法師

ちまきの馬いくばくしきいぞ

きうりの牛ハひきちらしかし

ちまき馬ハ茅を造りたる馬。きうり牛ハ胡瓜を造りたる牛。

連歌なり。今按ふ。ちまき馬ハ茅を造りたる馬。きうり牛ハ胡瓜を造りたる牛。こゝにちまき馬と千牧ハ馬ふのり。胡瓜牛と木賣ハ牛ふのり。逆さる秀句。今世聖靈會ふ。瓢或ハ瓜茄子をそ牛馬と造りて手向るハ。散木集ハ俊頼朝臣ハ集。俊頼朝臣ハ。鳥羽院の御宇天仁の比の人なりしと。天仁元年ヨリ今文化十年ハいくそ。或ハ仁和寺ハ。今信濃常陸下総かゝるハ國くにそ。蔵みくちひさゝる馬をつくりて七夕ふ手向ることあるなり。かの茅巻ハ馬胡瓜の牛ハ元七夕ニ手向さるものなりしなれば。牛ハ踈七夕ふ縁ふ手向ることなり。七月ふ七夕ふ。或ハ霊棚ふ手向ることなり。

手向るが前なり。七夕は手向るが後なり。とまれかくまれ古き事なり。

○奈良の庭竈 [二十三]

世間胸算用 元禄五年印本 巻之四云。正月奈良中の家々は竈いろりして。釜かけて焼火して。煮ふ數物してその家内是程も下人も亢しろふ楽居して。不動の居男ぬ是く。而乃ちりとて物は入さる丸餅と。竈火して焼喰もいゆりたる云々」しるしたり。これもみな昔の庭竈なる考へれりべし。これ前は地火炉の遺風なるべし。

○元禄二年の句

そもそも家はのどりてうれいの嘆繁のなりぐさとやいはん

叡慮はて猪は氏や庭竈　芭蕉

五元集拾遺

竈牛は雑煮と焼りけり　其角

荒木の名もなのりて竈は奈良のふかぐさ蓋奈良が其原なるべし

○江戸吉原は今も正月竈は焼火とは事なり。これは吉原附會の説とはいへども。実は竈は遺風なるべし。昔はなるひ様とは奈良の竈乃もとなるひふるとは。元吉原は

此より傳へる事なるべし。今は竈にて焼火をするのみ。

○長崎杜餅并幸木 [二十四]

世間胸算用 巻之四は。長崎の年は暮の事とて。餅は家々の恵方は「餅は其家々の恵方は」とて。正月十五日は左義長のしるしとて。杜をしたりて仕舞は一うと大こく杜はうらつけて祝ひ。是は正月十五日は左義長は是也。雑子。あらひ塩鯛赤いもの昆布鰹牛蒡大根。三ケ日はつゝみ料理乃りの。此木はつりさげて竈をみざりて。とでは大海日は夜は入れた。杜りひじきは奥ひく。まく。古でつゝりしるべと大こく。又荒塩蕪は蕪の丈當年は之方は海より潮が来つゝ。竈くといふ事はまりうるん。松つき物は一は本ゆるべし」しるしたり。これは元禄年中は第一之長崎は人は問しは。此杜餅は遺風今は也なり。餅は延命袋の形はつくりて。大黒柱は打つけて是春はつりておのづから落る依まちて。わざりたらんとぞ。

○宗祇の蚊帳 [二十五]

今俗ふんえをつくりてさぶ。虚言して自誇事と。百七八十年前の諺よ宗低の蚊帳
をつくるう。宗祇法師とおかし蚊帳ふ麻さうと虚言して。誇し去なりしろ。世は流よ
なりしとの。

崑山集 嘉安四年撰明暦二年刻 巻三井ぢうそ 面白紹一の法拠流とぞ一をおりム

おかし蚊帳かやふ祢しふ則けふ義哉　貞徳

ものは事れ清ふ実ふく余はと宗祇のかやし
いつまなれをもと故事ふ用ひいる

以上右の集ふ見えて此後元禄の比までもいひ伝へふや

西鶴おごりの友 元禄十二年刻 巻之四ニ云

「ある時旅宿ふく山家
ひとる商人集りて今宵八七月七日星もあれ天の川かさぐのけてるるとて
鳥口巽とうとあふて天上と星ひとる事ぞと子細沢れどいづまも紙打てをるふ下ふ
おれぬ人かへ公家のおしてまるを人ぞ我いか中ぞ分ぬれど一ぢ連歌師れ宗祇法師諸国を
修行し縁ふ時人れ縁いもれぬかのあり。東海道岡部の宿ふて相宿同じ蚊屋ふ移さ
ぬ昔物語とし云ふ」

骨董集上編中之巻終

嫁迎記

○火燵并地火炉再考追加

嫁迎記ふ「とよい夜ふ事といふる條ふ「とそでれだいふ袖ふ。たつの
ふうるあるおのてるころくありるてあるおるどあるりのまそふ」とあるこれわ東山殿の
ふれば当時こそこと云ふ脚炉ふ足をあてめしふ東山殿の
決ふ唐ざるふ窓めをつくてふるき絵巻の図も
いどる。東山殿のころ以前のさるを云ひるるらん。

宗長手記 下巻 大永六年十月の條ふ「ある歌
炉火ちどろある火榻ふ祢ふて紙ふお火のたくをもしらぬおどろた
て云ふ」又同七年十月の條ふ「とのいろつき火榻ふあしさうぐて云ふ」とあり
元本火榻の字ふあふつけざれども火榻の二字をこたつとうむべた例ふ明應
の撰ふといふ

林逸節用集 ニ火燵脚榻
たれば音便ふて火をこたつと榻をたつと
火榻の字をもこたつと讀べきし。

○きと右の書ふ「炉火ちどろある火榻ふ」とあるを考るふ当時こたつと云ふ今云こたつやぐら
の事ときとと。今炉火をこたつと云ふ事ふ嫁迎記ふ「こたつのまそふるりの」とあるも

今の言ふそいらぐ・ごろ・ごろのやうなるあとの義なるべし。寛永のころ別に高こたつといふものぞ。今のこたつ・ごろ・ごろとなるべきさまなり。いひくあり〜なるべし。寛永のころ別に高こたつといふものぞ。今のこたつ・ごろ・ごろとなるべきさまなり。ぜひとも云名をおひ〜こと前よりいるがごとくなるべし。今も信列のこたつ・ごろ・ごろ・ぬくもりにぬひぐるみをきて火桶をかこむサの通例なりひくきなり。それぞ古制のなごりなるべき。格式をつくるい後なるべし。

印本今昔物語 一巻 忠明云々の條に「太明いく・火燵乃灰をかゝく取集め云々」とあれど旧本まい火燵の字なし。印本ふるい後のさかしらなり。印本のまをえて。

こたつの名いふなり。とみなりひまぐひそ。

○前の火燵の考への因に地火炉の事をいふるに引りしたるとそに挙。

續古事談 巻一 「一条院の御時臺盤所にて地火炉はいでと云事あり云々」

榮花物語 玉のうてなの巻に「内厨子所のめしをすれば云々又たりとあけたるわらしづらのはきくきたれ八六人ちひろのすそにねるこそおのくといそぐめり」

新撰字鏡 爐の字の訓火呂とあれば地ひろ〜地炉といふが如しとこれ初て道世の庭竈い地火炉ついでの遺風なるべし。唐土の煖炉會なども似たり。

●地火炉の事は外にもあれども〜ぬくもたづねどえあらたるまゝにあらいぞくかきろるべ

○右に引る中古近古の書どもまゝ假字のところえぬもおかれどそのまゝにたるとはいへども意をうちひゞ古書のたゞしさを失ふよりおのれがいくる言なる假字のたぐるゞ

○後帙目録

▲下之巻前

(一)球杖考 打毬樂圖・古製 今制ぶりぐの考・礫毒圏 (二)ぶりぐの圏 (三)羽子板考 (四)粥杖考 北越の祝木の圏 羽州のあいなけ棒の圏 (五)お乳母日傘といふ諺の原

六 ひゝなの名義 ひいなの假字 七 雛遊のちゞめ 八 雛社 雛合
九 源氏物語の雛 十 古書どもふえ〳〵 雛はらさゞ
十一 ひいなの調度 十二 ひいな衣・粟島の神縛 十三 古製雛圖 制作質素
十四 室町家の比の雛圖 十五 伊勢の小米雛・昔民のわらの雛 質素
十六 雛遊三月三日小さゞまり〳〵 考 十七 唐の時三月三日鏤人あり事
十八 ひゝなの繪櫃 昔の質素 古圖をそさゞめ 雛はらの 十九 享保の比の土雛圖
二十 雛の使圖 菱川が筆 廿一 雛桃折敷圖 質素 廿二 後雛の考
廿三 姫瓜の雛 廿四 ひいな草

▲下之巻 後

一 子日の雛遊 二 贖物のひいな
三 勸進比丘尼の繪解・古圖 四 屏風の古画・朋腹・やこの夜 ・廿六夜・あいもの
五 端午の茅巻馬・艾虎

▲おのれ古びらゝひゝなの假字を用ゆれども比比奈の假字も古音よろしゆゑ用ひゝなをうとさゞひるもあゝぞかゝへ後快の巻ふいろ

六 端午の頭巾 篠 小人形・其角が發句の解 七 端午のあやめ花・五月まりと云物の古圖
八 あうさの念佛の古圖・并に考へ 九 後妻打考 同古圖・うちうち打ハ宝物集その外古音よろしそのとあり〳〵
十 比比丘女・童姿の子ころ 十一 酸將漿を吹 ・比事 今こうりあるそ八百年ぞうり
前に考へあり 證 十二 小児をおどとよぐあとりのこうの考 十三 おくれ髪・白地藏・今こかれど云ふ・某びと某びと各義の巻
十四 手鞠考 十五 たるゞの牛馬 十六 上古中古近古の女の髪の風
十七 中古近古の編笠の考・同古圖・其角が富士のあるの發句
十八 ひんだの踊・掛踊・伊勢踊・をゝどり・船・たるゞ踊・おどの考・同古圖
十九 椀久塚 牛おろ〳〵坂・椀久寄進の絵水仏の圖 廿 お国哥舞妓の古圖并考・念仏をゝどり
廿一 傳助が紙ゝとつるゝ・こせ舞・ゝ・ゝいでとつるゝひゝなの
廿二 い〳〵なごりい〳〵なゞ・今こそ玉のあと

▲再考標目

一 紺屋の白袴 再考・前快二冊の巻〳〵考へのたゞるあり ならざるあり 引ゝ巻のをりに附る標目左のごとし 勸進聖判職人哥合 ・ 二 竹馬再考

(三) 菖蒲冑再考。[園太曆] より前。[弁内侍日記] より

(四) 粉の看板再考。[日蓮御書] より

(五) 錢湯風呂再考。湯殿といふことあり。[そぐろあ後] の錢湯風呂をあつ風呂なりと。諸書より証をあつめ考へたり。かくべき事。

(六) 石榴風呂鏡磨再考。諸書より証をあつめ考へたり。かくべき事。

(七) 伊勢の風呂吹再考。引用せるおもあり。

(八) くさ帯再考。[衣服令義解] 諸王諸臣の祀服の下より

(九) 豆腐をめぐりの言。[上臈名事職人尽] 七十一番

(十) 提灯行灯再考。[塵囊鈔] その外引用せる。

(十一) ぎようのちやうちん再考。

(十二) 蠟燭再考。諸書を引て つづらにしつり

(十三) 伏編笠名義。考証

(十四) 桔梗笠淺葱椀。[貞徳文集] [新續犬つくば集] を引用せり

(十五) 浮世御坐再考。[和訓栞] ようきあり。[ほ藩] ようと。

(十六) 奥を手と云言の再考

(十七) 硯蓋再考。[今昔物語] より硯蓋より者あの交菓子をこりたる事ありたれども民間にもこれを用ひる。宝永の後の事なるべし。但式正のものにあらざるべし。その外古昏より蓋手管の蓋あり。その名義前の証あり。[長門本平家物語] を引て再び考へ

(十八) 衡重食籠再考。[そぐろ後] の名義前の考へかたなる事をあつめこれをもて此巻に入る

(十九) 異制庭訓年歴考。昏中より天竜寺の名あり。[食籠の図] [東山殿御飾記] [君基觀] [祖傳抄] あつめこれをもて再考あり

庭訓往来より前の物語りとのひしかりろ〜

[奥をとくとひんと毛詩の注又夫木抄より考る所あり]

(二十) 無木といふる物の再考。[十訓抄] [塵囊抄] あるよりこれたる死木養のことをいふを前より

(廿一) 一二の再考。前よりいふるのたぐひなるべし。[長門本平家物語] を引て再び考へ

(廿二) 根本雜事再考。此經の本名い根本説一切有部毗奈耶雜事と云

巻第十六小猴猴投果の事あり。佛與天受の語なり。[義楚六帖] い大より

畧文よりて異同あり。ふたれをたぐも。此外より再考あれども

以上後帙二冊来乙亥春發行

○前帙二巻の引昏かるいろいろ紙繪物語のたぐひなれど近古物語のそこのうちのもまとこれた事もたるめれば当時を考へたる

あきらかもめるべきさいあれ識者の看小あつべたのあるれば。その昏目を挙ぐ。

○後帙二巻ハめから古昏を引つれど。とあるれば。これもとぐく昏目を挙る

小いとゝめ〳〵ゞ。わづらに毬杖ぶるを〳〵粥杖雛遊考の引書を左に挙て。前帙二巻と趣の異なるをたゞ〳〵む。但書籍の年序よもゝいらぬ。引用する次第はたゞひとゝるゞり。

▲毬杖ぶり〳〵の考引書

○萬葉集　○續日本後紀　○和名鈔
○事物紀原　○遼史　○うつほの物語
○源平盛衰記　○平家物語　○義經記
○袖中抄　○日本歳時記　○浮れ〳〵草
○遊学往来　○訓蒙図彙　○源氏物語
○下学集　○世諺問答　○中山傳信録
○塵嚢鈔　○和漢三才図會　○滑稽雜談
○本草啓蒙　○三才図會　○年中定例記 以上四種

▲粥杖考引書

○清少納言草紙　○狩衣　○弁内侍日記
○増鏡　○下紐　○日本歳時記
○日次紀事　○日本風土記　○婦人養草
○年中故事要言　○和訓栞　○簾中舊記 以上十二種

▲雛遊考引書

○和名鈔　○契沖雜記　○玉かづま
○日本紀　○釋日本紀　○厚顔抄
○古事記傳　○齊宮女御集　○中務集
○源氏物語　○うつほの物語　○榮花物語
○狩衣　○とゝもへばや　○増鏡
○紫式部日記　○清少納言草紙　○濱松中納言物語

○あけくれの日記　○雛遊記　○古事記
○盍書鈔　○拾芥抄　○世諺問答
○無言抄　○御傘　○増山の井
○加茂保憲女集　○国朝佳節録　○文旨雑録
○名物六帖　○雍州府志　○五元集
○鋸屑　○其袋　○續猿蓑
○土左日記　○日本歳時記　○女用訓蒙図彙
○諸国奇遊談　○昔ニ物語　○本朝食鑑
○滑稽雑談　○五元集拾遺　○朱むしさき
○和漢三才図會　○春曙抄　○異本和泉式部集
○丹後守為忠家百首　○婦人養草　○羊中風俗考
○女用花鳥文章　○江家次第　○日本紀通證 以上五十四種

醒醒老人著 京傳

備書　上巻 嶋岡長盈　中巻 橋本德瓶

剞人　名古屋治平　鈴木榮次郎

○骨董集上編　後帙二冊　来乙亥春發行
○同　中編　二帙四冊　○同　下編　二帙四冊　追ニ出板

加減朱子讀書丸　一包　一匁五分
●氣こんをはらくくしめあがえをとくくを●心腎のきくとそんをかぎうのつうどめてくと心をつくの人はあのごうくら病を生じて天寿をそこなうのべくく●蔵行ふたくいて益多し●きくくつ●胸の酔●ふあく●うくくあくくひい●多く病の人用てうくく●老若男女よめぎくくを考る者を江戸京橋南山東老店一粒よそ即験あり

印章篆刻　●玉石銅印古体近体りとあよ応ぞ●ろくく石上刻一字一匁次刻一字朱文七分白文五分大印は限とあくぞ　京山人百樹

山東庵主人著

雜劇考

前編 二冊 古代の雜劇（シバイ）を考へ（めぐらし）た
後編 二冊 古画古図を載り 近刻

文化十一年甲戌冬十二月發行

大坂心齋橋筋傳馬町
鹽屋長兵衛

書林

江戸通油町仙鶴堂
鶴屋喜右衛門梓

和漢印章考 京山岩瀬百樹著 全六冊 近刻